
生き方難民の証

富崎ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生き方難民の証

【NZコード】

N1424Z

【作者名】

富崎ヒロ

【あらすじ】

主人公・五十嵐新太は「自分の幸せが分からない」という悩みを持つていた。晴れて高校生になった新太は新しいクラスで双子の天才少女と出会う。その双子は自分達を科学的思考にとらわれながらも「科学を否定し、科学に頼らない生き方」を模索している、「生き方難民」だと言った。そこから「新しい生き方」を目指す難民達の物語が始まるのであった。

「あなたは何をしている時が一番幸せですか？」

新太^{あじた}がその問いに出会つたのは中学二年が終わろうとしている時だつた。野球をしている時、サッカーをしている時、本を読んでいる時、普通の人だったらそんな風に答えるだろう。一人でいる時、そんな答えもいいかもしれない。逆に、毎日が幸せだ、という人もいるだろう。だが新太はそうではなかつた。この問い合わせ胸に深く刻まれた理由が新太にはあつた。

新太にはこの問いの答えがなかつた…。

それから新太はこの問いの「答え」をさがした。一生懸命さがした。色々なことをやってみた。しかし「答え」は見つからなかつた。この結論に至つて新太はまさに言葉通りにその場から動けなかつた。新太は別に毎日が不幸というわけではなかつた。今まで可もなく不可もなく平々凡々と生きてきた。だからこそ、この問い合わせ出会つて今までの自分の人生が否定されたような感じがした。

それからは、新太は方針を変え自分と同じ仲間がいないか一年かけて探し回つた。自分に共感してくれる人が欲しかつたのだ。

「あなたは何をしている時が一番幸せですか？」

そう聞いてまわつた。しかしみんなこの問いの「答え」を持つていた。そして中学を卒業し、高校生となつた。新しい環境での新しい生活。ここに問い合わせがあるはずだ、いや、きっと見つけてやる、そう信じて新太は決意を胸に門をくぐつたのだった。

沢城高校理数科一年教室

そこに取り立てて目立つ特徴もなく、どちらかといえば暗い感じのする男が、これまた取り立てて目立つとは言えない場所に座つていた。今日は新学期の初日。辺りを見渡すと知らない顔ばかり。新太は小さく溜息をついたあと、視線を窓の外に移した。

「ねえ君、名前なんていうの？」

いきなり声をかけられ動搖した新太は

「…五十嵐…新太。」

と小さな声で答えた。

「新太つていうのかあ。オレの名前は秋野シンジ。よろしく。いやー困ったよ、知り合いが全然いなくてさー。このままじゃ一人ぼつちになつちまうと思ってたところに、いかにも話しかけてください的なオーラを醸し出してる人が見えたからさー。そんな所でじつとしてないでホームルームまで時間あるんだしさ、ちょっと学校の中見て回らない？」いきなりのことでの新太は虚を突かれた。

（しかも勝手に身に覚えのないオーラまで出してることになつてるし）

とひそかにツッコミをいれつつ、誘いにのるかどうか新太は迷つたが、

（いい人そらだし何もすることが無いし、まあいいか）

と新太は渋々席を立ち秋野と共に教室を出た。

「この学校つて頭良さそうな人ばかりだよな。オレみたいなやつは絶対ついていけねえよ。特にオレ達のクラスにいる瀬戸内とか言う双子の女子。あの二人は凄いっていう噂だぜ。新入生テストでも一番と二番だつたらしいしなー。」

教室を出て廊下の角を曲がりながら秋野が言った。廊下には他のクラスの生徒が溢れていたので二人はそれを避けながら他の一年教室の前を順に歩いてまわっていた。

「そういえばオレ達のクラスの担任になる赤島つていうやつ面白く

て面倒見のいい、いい先生だつて。この学校怖い先生が多いらしいからよかつたな。」

そろそろ一年教室を三分の一くらいまわり終える所だつた。新太は一瞬あの質問をしてみようかとも考えたが、何だか場違いな気がして、結局

「秋野君はこの学校のこと詳しいんだね。」

と当たり障りのない返事をしていた。

秋野はニッコリ笑つて答えた。

「シンジでいいよ。オレも新太つて呼んでるし。この学校のことは同じ中学の先輩に聞いたんだ。別に詳しいわけじゃないよ。」

「そうだつたんだ。」

新太は答えた。

「でも……」

シンジはぼそつとつぶやいた。

「がつかりだつたなあー。クラスの雰囲気は想像してたのと違うし、せっかく高校から新しい自分に生まれ変わろうと思つてたのに、そんな勇氣もどつかいつたし。」

そしてシンジは続けた。

「自分が幸せになつている姿が想像できないよ。」

（えつ……）

新太は驚いた。類は友を呼ぶとはこのことだろうか。自分が一番聞きたかったことを目の前にいる相手が言つてくれた。そして初めての仲間を見つけたと思い新太は少し嬉しくなつた。

「キーンゴーンカーンゴーン」

ちょうど一年教室を見終わつたところでチャイムがなつた。

「やべつ、早く教室に戻らなきや。」

そういうと新太とシンジは急いで教室に戻つた。

「それではホームルームを始めます。」

教壇に立つた背の高いほつそりとした教師がそう言つと教室は静ま

り返つた。

「えー、みなさんはじめまして。私はこのクラスの担任になつた赤島といいます。年齢は秘密ですが、何と！ちょうどあと一ヶ月で誕生日を迎えます！プレゼントをくれる心優しい人が一人でもいると先生はうれしいですねー。」

そういうと赤島は教室を見回した。

（なるほど、これがシンジがさつき言つていた面白い先生か、つまらん…）

と新太は思った。受けを狙つたつもりだろうが、まだ学校に慣れていない生徒たちの中で笑うものはいなかつた。

「コホン、と軽く咳をして赤島先生は続けた。

「えー、初めて顔を合わせる人も多いと思うので、まずは自己紹介から始めたいと思う。出席番号順に秋野から始めてくれ。」

先生から指名されシンジは席を立て笑顔で言つた。

「秋野シンジです。出身中学は南中です。色々と迷惑かけるかもしれないけど、よろしくお願ひします。」

それから次々と自己紹介をして行きあつという間に自分の番になつた。

「東中出身の五十嵐新太です。本を読むのが好きです。よろしくお願いします。」

そういうと新太はすぐに椅子に座つた。それから残りの人達が自己紹介をしている間はぼーっとしていたので、ほとんど聞かないままでいつの間にか自己紹介が終わっていた。そのあとは先生から諸々の連絡、プリント配布があつたあと、みんなで体育館に移動するため新太たちは教室から出た。

体育館に行く途中でシンジが話しかけて來た。

「新太つて本を読むのが好きだったんだな。」 そういわれて新太はそういえば自己紹介の時そんなこと言つたなあと思い出した。本が好き、とは言つたが、あれは一種の定型句のようなもので、実際は

他の人と比べて読んでいる量特別多いというわけではない。ああでも言わないと、他に言うことが無かつたのだ。初対面の人たちに「自分と同じ種類の人間を探しています。」何て言えない。そもそも本が好きだったら、それがあの問い合わせの答えになつていて。しかし、そんなことをいちいち答えるのはめんどくさかつたので新太は「まあね」とだけ答えておいた。

「それにしても、あんまりパツとしないやつばかりだつたなあ。」シンジは小さな声で言った。それは新太やシンジも同じだった。みんな簡単な自己紹介で自分をさらけ出す人はそうはいないと新太は思った。類は友を呼ぶと言う言葉を信じて新太は少し期待していたが、自己紹介だけでは自分の仲間がいるかどうか判断できなかつた。新太が少し残念な気持ちになつているとシンジは続けた。

「やっぱり瀬戸内っていう双子は違つたな。近寄り難い雰囲気つていう感じ。絶対友達にはなれそうにない。」

自己紹介を聞いていなかつたのでなんとも言えなかつたが、新太はとりあえず「同感だ」とつておいた。

体育館に着くと他のクラスは既に整列を終えていて、新太たちのクラスが並び終わると、まもなく式が始まった。既にそのありがたみを失つた校長の言葉から始まり、無くともいいんじゃないかと思う、いろいろ面倒臭いことをしたあと、教室に戻り、その日は解散となつた。色々と部活の勧誘があつたが新太は全く興味がなく、そのまま学校をあとにした。

帰り道。

(そういえば今日からこの道が通学路になるんだ)
と新太は思つた。同じ制服の人もちらほら見かける。新太は電車通

学だったので、駅に向かつていた。

(行き通つてみた時はそんなに複雑な感じはしなかつたからすぐ慣れるだろう。近道とかあるんだろうか、あつたらいいな。)

とか思いながら新太はとぼとぼ歩いていた。特に変わった様子のない普通の道だ。あえて変だといえばさつき変わった名前の汚らしい怪しい店があつたくらいか。そのまま駅に着いた新太はちょうど来た電車に乗った。

「扉、閉まりまーす。」

そういうと電車は扉が閉まり、電車は動き出したのだった。

「あーあ、疲れた。」

新太はそういうとベッドに倒れ込んだ。今日はシンジと出会い、ほとんど一方的に話しあげただけだけど、はじめて仲間（らしき人）を見つけた。

（クラスの雰囲気も何となくわかつたし、これから楽しい学園生活が待っているといいな。）

と新太は思った。

「そーだ、明日から早速授業だつた。予習終わらせなきや。」

そういうと新太は机に向かった。

あれから、新入生歓迎会、部活動勧誘等の行事を経て一年生はだんだんと学校に慣れていった。

新学期が始まって二週間が過ぎた。

新太は移動教室のため教科書等の勉強道具を持つて理科室へ走っていた。

「近道じゃなかつたのかよ！迷つたじやないか！」

隣には秋野シンジがニヤニヤしながら走っていた。

「おかしいなあ…。確かにこっちの方が地図では近そうだったのに、位置的に。」シンジは残念そうに言つた。

「やっぱりみんなについて行つた方が良かつた…。ああ！時間がありと一分ちょっとしかない！」

二人は理科室を探して三階をグルグル回つていた。

「おい、五十嵐に秋野じやないか、何してるんだ。迷つたか？」偶然通りかかった担任の赤島に一人は声をかけられた。

「はあ…、先生、理科室つてどこですか？三階ですかね？」

「ああ、理科室は三階だが、あそこの階段からしか上がれないんだ。

赤島は窓から外を指さした。

「ホームルームで言つたはずだが、聞いてなかつたな？ちゃんと次からは…」

「すいません！ありがとうござります！…」

二人は話を聞くとすぐに走り出した。

「ありやー、廊下を走るなとも言つたはずだが…。

残された赤島はボソッと言つた。

「はあ…、はあ…。お前のせいだぞ、シンジ。」

新太は息切れしながら言つた。

「でも、まあここじゃん。」んな」とやめるの一年の最初だけだし、
いこ思こ出じやん。」

「意味わかんないし、それに…うわっ！」

新太は階段を上がったところで、人にぶつかりそうになつた。

「あー！」めんなさい。よそ見してて。大丈夫？」

新太はぶつかりそうになつた女子に謝つた。

「……………」

た。

「今の瀬戸内さんしゃん… 何か話でたにど
どうかしたの?」

「いや…、ちょっとぶつかりそうになっただけ。心配ない。」

「へ? そこには何か落ちてる?」

それを聞いてシンジが指差した先には白い色の横縞が數本入った

新太はそれを拾いあげた。

（ふ？何が小石みたいのか入ってない…）

「やべつ、早く教室に入らないとー。」

そう言つてシンジが教室に入つた。

新太はその落とし物をポケットにしまって、教室に入ったのだった。

「……という」とで実験は終了です。ではレポートは明日までに出してください。今日はここまで！」

授業が終ると新力はすぐは前方の方の席にいる瀬戸内さんの所へ近寄つた。

「あの…これ、せき廊下で落とさなかつた?」

「……。」

瀬戸内さんは新太の顔と手を交互に見たあと不機嫌そうな顔をしながら、無言で新太の手からそれを受け取った。

「それじゃ、僕はこれで。」

そういうと新太はシンジと一緒に教室を出た。

「ね、どうだつた？」

帰り際シンジがそう尋ねてきた。

「どうだつたって、何が？」

「二人の反応だよ！」

「二人？ 何で二人？」

「双子だからだよ！ 黒板に向かって左に座つてたのが姉の冥ちゃんで右が妹の舞ちゃん。ちなみにアラタにぶつかつた方は冥ちゃんの方な。」

「僕は左の子にぶつかつたのか…あれ？」

新太はさつきのことを思い出した。新太は前の席に行つて確か右の人には落とし物を渡した。

「しまつた！！ 渡す方間違えた！」

「なんだと！」

どうりで渡す時反応が変だつたわけだ。さつきのことを思い出して

新太は恥ずかしくなつた。

「まあ… 双子だし… しあうがないだろ…。」

新太はそう開き直ることにした。

「間違えねえよ。冥ちゃんは優しそうな感じで、舞ちゃんはツンツンした感じだし。それに舞ちゃんは髪むすんでたじやないか。」
（ そうか、二人にはそんな違いがあつたのか。今までよく見てなかつたから知らなかつた。次からは気をつけよ。）

新太は心の中で静かに反省し、次に生かす決意をした。

「… ていうか何でシンジはそんなこと知つてんの？」 新太は不思議に思つて尋ねた。

「そりゃーまあ、見てたからな、一週間。」

「…何で？」

「だつてかわいいじやん！やつぱそういう感情つて大事じやん。高校生活を楽しむためにも！」

「……」

新太はどう反応すればいいのか困った。シンジのいう「そういう感情」というものに新太は疎かつたからだ。

（てっきり、シンジは自分と同じ側の人間だと思ってた。同じと言つても考え方は違うものなのか。）

新太はちょっと残念な気持ちになつた。

「でも自分のじゃないなら、何で受け取つたんだろう？」

「さあ？ 何でだらう？」

二人は理由を見つけられぬまま教室に戻つた。

同じ日の放課後

「新太、一緒に帰ろうぜ。」

シンジは新太にそう言つた。シンジも新太と同じ電車通学だつた。しかし、新太は

「ごめん、先帰つてて。ちょっと寄つてくれとこがあるから。」
と断つた。

「そう、じゃあまた明日。」

そう言つとシンジは帰つていつた。

（結局、謝れなかつた。何か女子が集まつて話し掛けづらい。また明日でいいや。）

それから新太はかばんを持つて教室をあとにした。

新太が寄つて行く場所、それは図書室だつた。新太は時々図書室を利用していたのだった。

新太は図書室に着くとかばんから借りていた本を取り出し、カウンターに返した。そのあと新しい本を借りるために図書室をまわつた。新刊コーナー、最近の小説が置いてある場所とまわり、奥の本棚に行くと、人影が見えた。

(ん? 誰かいる。)

よく見るとそれはあの瀬戸内さんだった。

(どっちの方だろう。髪を結んでるから、瀬戸内舞の方か。ちょうどいいや、さつきのこと謝りとこう。)

そういうと新太は彼女に近づいていった。

「あの…瀬戸内さん…。」すると彼女はこちらを振り向いた。

「何?」

「さつきは落とし物間違えて渡してごめん。双子だから見分けつかなくてさ、あれどうした?」

彼女は何か思い出すような仕種をして

「ああ…あれ、冥に渡しといったわ。私も同じもの持つてるから、あれ渡されたとき、最初、自分が気付かないで落としたものだと思って一応もらつといったけど、あとで確認したらちゃんと自分のあったし、冥の方は無くしたって言つてたから。」

「へえ、そうなんだ。助かったよ。ありがとう。」新太はとりあえず落とし主のもとにあれが返ったことに安心し、安堵のため息をついた。

「そ、れ、と、今度から間違えないでよね。そのために髪結んでるんだから。」

彼女は新太をにらみ付けていった。

(やっぱり間違えたことは根に持つてゐみたいだな。
新太は苦笑いをして答えた。

「じめん、以後気をつけます…。」

「ところで、あの中何が入つてるの。小石みたいだつたけど。」

彼女は戸惑つたように答えた。

「…硫酸銅の…結晶…。」

「え?」

聞き慣れない言葉に新太は聞き返した。

彼女は意を決したようにいった。

「硫酸銅…まあ、正確には硫酸銅五水和物。化学式CuSO₄・5

H₂Oで表される青色の綺麗な結晶。むかし冥と私と兄貴の三人で作ったことがあるの。あれにはその時できた硫酸銅の結晶のカケラが入ってる。初めてした実験だったから思い出として大事にとつてお守りみたいにしてる。中学校の教科書に出てきたでしょ？硫酸銅。もつと詳しく知りたいなら、自分で調べて。」

「……。」

新太は返す言葉がなかつた。

（忘れてた。そういうえば彼女は学年トップクラスの成績を誇る双子の片方だつた。）

新太は彼女が手に持つている本をちらつと見た。

「身の回りの科学」「科学の誤解を正す」…。

科学関連の本のオンパレードだつた。

「科学…好きなんだね。」

新太がそういうと、彼女は顔色を変えて言つた。

「なにいつてるの、わたし科学嫌いだから！勘違いしないで！」

そしてカウンターの方へスタッタと歩いて行つた。

（……？科学嫌いなのに、実験したり本読んだりしてるのが？理科の成績も僕よりも良いのに。頭いい人はよくわからん。）

カウンターの方を見ると、もう彼女はいなかつた。

「はい、どうぞ。」

「ありがとうございます。」

新太は自分の本を借りると図書館を出た。

（もしかしたら彼女は誰かに本を借りてくるよつて言われただけも
しないな。）

新太は無理矢理そう結論づけた。

（ああ、帰つたら宿題とか予習とかやらないといけないな。嫌だな
あ。）

新太はスタッフと階段を下りてながらそんなことを考えていた。
（ん…？ そういうえばレポート提出しなきゃいけないんだつた。教室
に忘れて來た。提出期限は… 今日だけ？ それとも明日だけ？ と
りあえず取りに戻らなくちゃ。開いてればいいけど…。）
進行方向を変えた新太は教室に向かって歩いた。

14

「…ん？ 五十嵐じゃないか。またあつたな。また迷子か？」

担任の赤島だつた。

「違います。図書室に行つた帰りです。先生もよく僕に会いますね。
どうかしたんですか？」

「いやー、私は常に生徒の味方だからね。いつでもどこにいても生
徒が何してるかわかるんだよ。」

「それつていつでもどこにいても先生の目から逃れられないってこ
とですか。：GPS機能付き携帯と同じですね。」

「…まあ、確かに。その通りなんだが、何かもつといい反応の仕
方があるだろう？ ストーカーだー！ だの。何か言つて恥ずかしく
なつて來た。」

「あ、何かすみません。恥ずかしい思いをさせてしまつて。」

「いや、気にするな、少年。それにしても読書とはいひ心掛けだな。

先生も高校生の頃、年に一冊ぐらいよんでたぞ。何せあの頃は他のことで忙しかつたからな。」

「他のことって、まさか勉強ですか？」

「何だその、『まさか』って。安心しろ、オレは勉強じゃなくて○○に忙しかつたんだ。」

そして先生は真剣な顔付きになつて続けた。

「でもな、本は読まなくちゃダメだぞ。お前みたいな若者はこのオッサンと違つて未来があるしな。いっぱい本を読んでいっぱい勉強しなくちゃいけないんだよ。：なんてな。こんなこという大人がいるけどオレはそうは思わないんだよ。」赤島は新太の方を見つめて言つた。

「勉強なんて天才以外は楽しいなんて思わないだろ？この際だから言つが、そもそもオレは勉強なんてただ脳を鍛えるためにするもんだと思ってる。だからたとえ遊びであつてもそれに脳を鍛える要素があるならオレは遊びを否定はしない。それにたとえ勉強が出来なくても自分の信念を強く持つてる人をオレは評価したい。どんなにでたらめな考えを持つていても『オレが世界を変えてやる』ぐらいの気概を持った人がこの世界には必要だと思ってる。いいか、まわりに何と言われようと自分を貫けよ。」

そういうと赤島はさつさと去つていつた。

（変な人だ…。わざわざ伏せ字にする必要ないよな、部活なんて。ていうか何部だつたんだろう。）

新太は今言われたことの意味やそれを自分に言つた真意をうまく理解できなまま教室へ足を速めていた。

教室に着いた新太は、開いていることを発見し、一息ついた。

（…開いてる。良かつた。）

開けようとドアに近づくと、中から話し声が聞こえて来た。

（…ん？誰かいるのか？）

新太は気配を消して中の様子をうかがつた。

「ねえ、冥。さつき図書室での五十嵐つていう男の子に会つたんだけど。」

その声は瀬戸内舞のものだつた。

「その男の子つて私たち二人を間違えた人？」

「そう、ふつう間違えないわよね。髪結んでるのに。」

どうやら瀬戸内双子の会話が展開されている様子だつた。新太はさらにドアに耳を近づけた。

「それで、硫酸銅の話をしたら、『科学好きなんだね』、だつて。まあ、硫酸銅の話をしてさらにこんな本を借りてたら勘違いしてしようがないと思うけど、あのばか兄貴といつしょにされるのは何か癪に触るのよね。あの兄貴、頭はいいけど話して疲れるのよね。何にでも科学的根拠だの定義だの厳密さを求めすぎ。普通に会話できなかっしら。やっぱここは徹底的に糾弾していくしかないわ。この科学といつ名の悪からみんなの田を覚ませてあげるのよ！」
(科学という名の悪…だと?)

新太は意味が分からなかつた。

「ねえ、舞。まだその話をしてるの？だいたい糾弾もなにも、一人じや何にもできないじゃない。まず仲間を集めなくちゃ。できればの話だけど。私は関わらないからね。」

「そのことについて考えただけど、その五十嵐つて子を実験台一
号にすればいいと思うの。」

(…何? !)

ただプリントを取りに来ただけが大変な話を聞いてしまつた新太は困惑した。

「それ、彼に迷惑でしょ。それにあなたのいう崇高な計画つていうのをどう説明するつもりなの。変人扱いされて終わりよ。」

瀬戸内冥よ、よく言つた、と新太は思つた。そもそも科学嫌いといながら科学の本を読む時点で十分変人だ。

「いつだって革命者は変人扱いよ。まずは理解してもらえる人に理解されればいいわ。」

「そのあなたの思想を理解してくれる人は一体何人いるのかしら？」「今の所私含めて三人ね。」

「…私と五十嵐君はもう決定なのね…。」

（勝手に決めんな！）

自分が彼女の理解者であると考える彼女の思考回路が新太にはわからなかつた。

「私はともかく、五十嵐君には理解できないんじゃないかしら。」

「大丈夫よ。彼バカつぽかつたし、おだてりやのつてくるわよ。バカとハサミとのりは使いようだつて言つじやん。」

「最後ののりは聞いたことないわよ。」

「まあまあ、とりあえずスローガンは考えてあるから。『ヒンド・オブ・サイエンス』どう？・ピッタリでしょう？」

「もう勝手に突っ走りすぎて、言い返す気も無くなるわよ。私は絶対関わらないからね、勝手にやつて。」そういうと瀬戸内冥はため息をついた。

「まあ、そんな固い」と言わずに、それで決意表明はこんな感じでいいかな。『科学が発達した現在において、科学というものは絶対的な力を持っている。我々はこの力によつて多大なる恩恵を受けると同時に、何か大切なものを失つているのではないか。人類は早くそれに気付くべきである。新しい生き方を目指すべきである。そして新たな世界を築こうではありませんか、我々とともに!』『どう?・ベシツ！』

「痛！何で叩くんだよ!」「あんたホントにそれでいいと思つてゐの?それじゃ怪しい宗教団体みたいじやない。それに私は舞の言おうとしてることはわかるけど、誰も寄り付かないわ、それ。もつとわかりやすくしなきや。あんたが一番したいことは何?」

「私は科学が嫌い。それで同じ考え方の人を増やしたい、それだけよ。」

「つまり、『科学が嫌いな人を見つける、もしくは誰かを科学嫌いにして仲間にする』活動をしたいってことね。」

「やつそう、そういうこと。」

もじこの会話を盗み聞きしてなかつたら、明日学校こんなこと言わ
れても絶対わからなかつただろつ。今も完全には理解していないが
……。

「じゃあ、その本はどうして読んでるの？それに勉強はどうするの
？科学が嫌いなら理科とかボイコットするの？私はそれでもいいけ
ど。」

「何言つてるの。そこはちゃんと公私の区別を付けるわよ。表向き
は科学大好きとして振る舞つておいて、裏で仲間探しを頑張る！そ
れでまず敵（科学）を知ることから始めよつと思つて、この本を借
りてきたの。」

新太はさつき先生がいつてたことを思い出した。

（こういうのを『オレが世界を変えてやる』という氣概を持つた人
達つていうののかな……。）

「はいはい、頑張つてね。もう私帰るから。」

そういうと瀬戸内冥は席を立つた。

（まずい…ひつち来る…）

新太は急いで離れようとした。その時

…ガタッ

（しまつた！）

「…誰かいるの？」

瀬戸内舞がこちらを振り向いた。

「ちょっと私見てみる。」そういうと瀬戸内冥はドアに手をかけ勢
いよく開けた。

ガラガラ…

目が合つ瀬戸内冥と五十嵐新太。

「…よ、よう。」新太が苦し紛れにそういうと、瀬戸内冥は二ター
と笑つて言った。

「ねえ、舞。さつきの話、話す手間省けたみたいよ。」

新太は今度は瀬戸内舞と目が合つた。
すごく嫌な顔をされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1424z/>

生き方難民の証

2011年12月26日21時57分発行